

安保法案に関する力の入った報道が目立った。「安保法案 本紙調査204人回答 憲法学者9割『違憲』」(7月9日1面、12日12、13面)。さらに「2万人超が抗議集会」(15日1面)、「反安保 大学にも拡大」(同日29面)、「ママ2000人 安保法案反対」(27日23面)など。独自調査を掲載する一方、市民の活動の広がりを丁寧に報じ、このテーマへの強い熱意が感じられた。

平和について考えさせられる記事も多い。「筆洗」(8日)では、原爆が投下された八月六日に広島カープ全選手が背番号「86」を身に着けることを紹介。首都圏日誌(21日19面)は、東京都国立市の平和都市宣言の「この世に、『正しい戦争』などというものはありません」という一文を取り上げた。

9日夕刊1面の「軍需工場動員 死を意識した青春」では、都内女学校元生徒の戦争証言集の刊行、25日夕刊9面では、高校生による自転車平和リレーを大きく報じた。

こうしたローカルな話題は知る機会が少ない。しかし、ローカルゆえに強く印象に残り、心を動かされる。朝刊に毎日掲載される「平和の俳句」とその背景を紹介した記事(19日1面、22日13面)も、一個人の体験や思いにすぎないのだが、忙しい日常の中で忘れがちな大切なことに気づく貴重な時間を与えてくれる。戦争と平和について考えることを読者に促す記事

平和を考える時間

を今後とも強く期待したい。子どもに関するきめ細かな取材姿勢にも共感した。「心にふれる話」(20日1面)では三月に五十一年の幕を下ろしたTBSラジオの子ども相談番組について紹介。18日夕刊1面では、五十年前に小学生が集まって横浜「子どもの国」の「けんぼつ」が作られたことを知った。

外国人の子の教育環境の問題(26日特報面)、美容院で切った髪を病気の子どもの医療用かつらとして提供するヘアドネーション(11日夕刊8面)、児童買春・ポルノ禁止法の改正(15日28面)、子ども医療費の助成拡大(14日6面)など幅広い。子ども目線で地道に取材し記事化する記者の存在を大切にしてほしい。

連載「命と国家」の最終回「精神主義の強制 今も」(31日1面)や「神戸



池本 美香

校門圧死事件25年」(9日25面)では、管理教育や集団の目的のために個人に我慢を強いる考え方は払しょくされたのか、考えさせられた。美術館による作品見直し要請などを取り上げた「高まる異論排除 まるで官邸翼賛」(29日特報面)や「育鵬社教科書じわり拡大 『戦争美化』市民団体に焦り」(30日同面)を読むと、とても安心はできない。こうしたテーマをきめ細かく追う姿勢は読者の共感を得るはずだ。(日本総合研究所主任研究員)

新聞を 読んで

※この批評は最終版を基にしています。